

森下雨村探偵小説選Ⅲ
目次

創作篇

桃色ピンクの胸衣ブラウス

2

*

魔まの狂笛きやうてき

91

死美人事件

151

室井君の腕時計

169

襟巻えりまき騒動

181

父よ、憂なふる勿なれ

196

四つの眼

208

隼太はやたの花瓶

219

噛みつくペット

230

救はれた男

241

上海シヤンハイの拘摸すり

249

不思議な肖像画しじやうが

261

天てん誅ちゆう

275

運命の茶房	294
深夜の冒険	307
友情の凱歌	339
胸像の秘密	348

評論・随筆篇

追想断片	360
三つのスリル	362
「悔ひなし、寂しからず」	364
砂金のこぼれ出た頃	367
老編集者の思い出	369
探偵小説の虫	380
郷里の森下雨村（森下一仁）	383
【編者解題】 湯浅篤志	388

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

創作篇

桃色の胸衣

拳銃を持った死体

一

おみね小母さんは、もう足掛け四年も三笠ホテルの掃除婦をつとめているが、ここ半歳あまりというものは満足以月々の手当をもらつたこともなかつた。

ホテルとは名のみで、その実、いつの間にかひどく不景気なアパートに変わつてしまひ、今では下宿人の数も部屋数の半分に足りない有様で、経営者の方ではいい買手さえあればいつでも手放したい肚らしく、この頃では監理も他人まかせて減多に顔も見せないし、下宿人から苦

情が出て建物の修繕などしたこともない。現に二三ヶ月前も、神田区内で一番の小型で旧式だと評判をとつている昇降機が故障で動かなくなつた時も、下宿人からやいやいと文句をいわれながら十日あまりも打棄つてあつたような次第で、自然、下宿人も減つてゆくし、受附兼帯の年老つた監理人と二人の昇降機係と、それにおみね小母さんだけの少い使用人にも満足に給料が出なくなつたわけである。

だが、おみね小母さんは当にならない僅かの給金よりも、下宿人からもらうチップという、この方は割合と確実な収入があるので、四十の坂を越した彼女には少々骨の折れる仕事ながら、厭な顔もしないで毎日午前九時には印形で捺したように錦町河岸のホテルの裏門をくぐつて、正午過ぎまで五階から一階までの掃除をつづけているのであつた。

五階建という大袈裟に聞えるが、背丈はあつても燐寸箱を立てたような上に高いだけの建物で、部屋数は全体で五十にも足りず、一階は別として二階から五階まで各階、丁字型になつた狭い廊下をはさんで八つずつの部屋があり、廊下の一端に今いった旧式の昇降機の入出口と階段がついているというだけのもので、おみね小母さんはいつも昇降機で真直に五階へ上つて、廊下から階

段を順次に掃き下ししてやることにしていた。

その朝も小母さん——部屋の掃除をまかしている独身者達はみんなそう呼んでいた——は雑巾を入れたバケツや箒ほうきなどを持って、神宮外苑じんぐうがいえんの芝生しばふに見かける掃除婦のような恰好かっこうで、昼間の昇降機係の少年を煩わづらわして五階へ向いて上っていったが、そこは全部空部屋あきになっていたので、ざっと廊下を掃いただけで、階段を踏んで四階へ向いて下りて来た。

四階には廊下を挟んで斜向はすかいに二人の独身者が住んでいた。片方の部屋へは入ったこともなかったが、南側の奥から二つ目の四十一号は、月々いくらかのチップのもらえる山名幸夫やまなさちおの部屋であった。そこでおみね小母さんは突き当りにある洗面所を綺麗にすると、廊下を掃きにかかる前に、いつものように山名の部屋の前に立って、預っている合鍵をドアの孔あなに差しこんだ。

カタと小さい音がして錠前あが開くと、おみね小母さんは把手ハンドルをつかんで、ドアを前方むかひに排しながら、何の気もなく二足三足、部屋の中に踏みこんだ。と、忽たちまちおみね小母さんは、

「ひゃーッ！」

と呻うめくように大きく息を吸いこんで、手にした箒をぼたりとそこに投げ出したまま、棒のように立ちすくんだ。

人が死んでいるのだ。自分が片足をかけた敷物の上、——すぐ目の前に、洋服姿の男が俯伏うつぶせになって伸びているのだ。

雨は上っていたが、空にはまだ黒い雲が低く垂たれこめている上に、二つの窓のカアテンを深く下してあったので、部屋の中は薄暗いような感じだった。が、そこに息の絶えた人間が横よこたわつていることに間違いはなかった。俯伏うつぶした頭の前へ、くの字なりに折りまげた右手の真白ましろいカフスにどす黒い血の痕あとが線をひいて滲にじんでいるのが、おみね小母さんの目にもはっきりと映ったからだ。

二

ぶつ魂消たまげた掃除婦がどんなにして階段をころげ下りたか、火鉢に手をかざして朝の新聞を読んでいた監理人の梅田老人がどんなにあわてふためいたか、そして、朝寝坊のアパートの住人達が急報に接して駆けつけた警官の靴音くつねに目をさまされて、どんなに胆いそをつぶしたか、その辺のところは一切読者の想像にまかしておいて——。

さて、死体の横った現場、山名の部屋の入口では、たった今自動車を下りて昇降機で四階へ急いだ警視庁の石

島警部と白川刑事が、先着の所轄署の司法主任から事のあらましを聴いているところであった。

「フム、すると被害者はこの部屋の下宿人じゃないのだね？」

色の白い温厚そうな顔に短い髭を生じた司法主任の言葉が途切れると、石島警部がちらと部屋の方を覗きながら訊き返した。

「そうなんです。それも電話では下宿人が死んでいるという話だったので、大方自殺だろうくらいに考えて来たんですが、自殺か他殺かそれはとにかく、今発見者が立会わせて調べてみると下宿人ではないのです」

「それで何者だかわからないのかね、身許は？」

「それが監理人も掃除婦もまるきり知らない顔だということです。もつとも監理人はここへ来てまだ間もないのですが、掃除婦の方は全三年になるので下宿人の顔は大概知っているはずで——」

「すると、この部屋の下宿人は？」

「山名といったかナ、君？」

司法主任がつと後を振り返って、廊下の壁に寄りそうて小さくなっているおみね小母さんに呼びかけた。

「ハイ、山名さんでございます」

「山名なんというんだね、名前は？」

「さア、お名前は何といますか——」

「それで、その山名にいつ会ったね？ 昨夜会わなかつたかね？」

おつかけるような警部の声に、掃除婦が返事に困って間諜々々としているのを見ると、司法主任が「その点は一応調べてみました」と断つて、おみね小母さんが通いであることや、山名は毎朝八時過ぎに勤先へ出かけるので、先週の日曜日以來顔を見たこともなく、昨夜のことは監理人の梅田老人について調べてみたが、老人が九時過ぎに自分の部屋へ入るまでは山名の姿は見かけなかった。したがってその後のことは夜の昇降機係の橋本という男に訊ねてみるほかはないということや、それから午前七時から顔を出す昼間の昇降機係の少年の話では、山名は大抵夕方方の五時までには帰ってくるが昨日は自分の交代時間である六時になっても帰って来なかつたし、今朝も見かけなかつたというようなことを報告して、

「何しろ経営者はまるで顔を見せんというし、監理人は木偶同然で下宿人の名前さえろくろく知らないんですから始末にいけないんです。それへもつて来て、昨夜の今朝なもので、僕の方も手が足りませんし——」

「その点は御同様で、——こつちも白川君と二人で当直をしていたので出かけて来たんだが」

強盗殺傷事件の頻発、帝都不安の聲に神経を尖らした当局は、歳末を前にして十日にあげず全市の非常警戒を繰返して躍起となつてゐるのである。昨夜も十一月以来、もう四度目か五度目の非常警戒で、今朝の新聞には××総監雨中巡視の記事が写真入りで大きく出ていたくらいである。

「それで山名の勤先というのはどこだろうね？ 監理人の方で判らないものかな？」

「そいつが判らないんです。それで今経営者の古畑という男を探さしていますが」

「夜の昇降機係の方は、調べたかね？」

「それが、実は手が足りないもので、まだ——」

「ああそうか」警部は呑みこんだ風で軽く首肯すきながら、「どうせ近所だろうから、その方は白川君に今行つてもらつうとして、四階の下宿人は山名の他に？」

「その筋向いの部屋に一人きりです。何しろこんな建物ですから四階と五階は空間ばかりのようで」と後を振向いて、掃除婦の肩越しに奥まった北側の部屋の入口を指して、「これは監理人の方で判りましたが、越田実というやはり勤人で、先々月越して来たそうです」

「勤人というと、やはり今居ないだろうね？」

「ハア、いつも九時前には出掛けるそうでした——」

それだけ聞くと石島警部は、やつと山名の部屋の方へ向き直つて、ゆっくりと靴を脱ぎながら部屋の中に踏みこんだが、そこでまた立ちどまつて司法主任を振向くと、「現場は発見のままだろうか？」と念を押すように訊いた。

「ハア、顔をちよつと持ち上げてみただけです。それと暗いので、こっちのカアテンを開けたんですが」

石島警部は南に向いたその窓をちらと見ただけで、すぐ死体の方に瞳をうつして、足許の古ぼけた敷物を踏まないように、気をつけながら、壁にそつて徐に部屋の中へ入つていった。

三

今まで警部の後に立つて、二人の会話を聞いていた白川刑事は、この時、初めて部屋の中の光景を見た。

独身者の住居らしい簡素な部屋で、西寄りの窓際に近くテーブルと椅子を据え、その傍に磨硝子のドアのついた大きい書棚が一つ、向つて右側は戸棚になり、左の方には壁にそつて寝台が置いてあるが、寝具は敷いたままでも寝たらしい様子はない。その他にはベッドからや

や離れて、円い小卓と折畳み式の簡単な椅子が一つきり、その卓の上に大方空っぽになったウイスキーの壺とグラスが二個、一個は伏せたままになって、真鍮の安物らしい皿にのっかっているのが目についた。

死体はベッドの足のあたりから、テーブルの前あたりへかけて細長く敷いた畳三枚分ぐらいいもあろうかと思われる絨毯まがいの、埃を吸ってひどく薄汚くなったカーペットの上に、頭部を奥に俯向いた姿勢で横っていた。年齢は二十七八でもあろうか、茶色の背広に薄い鼠色のオーバーを着た肉附きのいい、これという特徴もない代りに好男子らしい容貌をした男で、頭髪は長く、左で分けているが、俯向いた顔を持ち上げた時になったのか、櫛目が乱れて額の上に垂れかかっていた。その前額に近く折れまがった右手に拳銃が握られていたが、それがしかと握りしめているとも思えぬ程度に五本の指がかかり、左の手はすっかり胸の下に隠れていた。

弾丸は右の目尻に近く、殆ど眼窩といってもいいほどのところを貫いて、一と目でそれが致命傷であることを語っていた。

「他に傷はないようで、どうも——」

「踏みこんで傷痕を見ていた二人の後から、これも覗きこむようにしていた司法主任が低い声でまだ何かい

たげに呟いたが、石島警部はそれには答えないで、つと右手をのばして、目の前の床の上に落ちていた真新しいフェルト帽を取上げた。そして裏を返して見ていたが、どこにもサインらしいものもないと知ると、そつと元の位置にもどして、腰を伸しながら今度は窓際のテーブルに近づいた。

テーブルの上には読書電燈の下に旬刊の経済雑誌が二三冊と、インキ壺の傍に黒軸のペンと半分ほど使った表紙のとれた便箋、それに事務用の握りのついた吸取紙がおいてあったが、中央の大きな抽斗は三分ばかり、四段になった右側の小抽斗は殆ど全部抜き出したままになって、ひどく乱暴に内部を引っかきまわしたらしい様子だった。

「白川君、ポケットを捜してみたまえ。僕は鑑識課へ電話をかけるから」

石島警部がそういいすて、入口の左側にとりつけた室内電話の方へ歩いてゆくと、白川刑事は早速死体の傍に片膝をついて、外套から服のポケットを検べにかかった。が、オーバーのポケットからチェリーの函と銀座あたりの茶房のマッチが出て来たのと、ズボンのかくしに二円ばかりの銀貨が入っていただけで、被害者の身許を知る手懸りになるようなものは何も見当らなかった。で

も、最後に胸の下敷になった服の左側の内かくしへ手を入れると内容は空っぽかと思われるほどべったりとなった革の紙入が現れた。開けてみると十円札が二枚と五円札一枚、それに伊豆の温泉宿の単に上様とした十円の茶代の領収書が四つに折って入っていた。それにまだ何かあるような手触りがしたので、二重になった内側を覗きこむと、そこから小型の女の名刺が一枚出て来た。それには月島小夜子とレヴェューガールのような名があつて、その傍に牛込一五六二と電話番号らしい数字が鉛筆で書いてあつた。

「月島小夜子——、何だか耳にしたような名だが？」

白川刑事が名刺を手に小首を傾かげていると、

「君、それや一時鳴ひとこゝろした××劇団の女優の名刺じゃないか！」

と横合から司法主任の声がした。

「僕も聞いた名だと思つて考かえていたんだが、そうだったですかね？」

「ウン、確たしかに間違まちがひないよ。ね、石島さん、月島小夜子というのは××劇団の女優でしたかね？」

鑑識課への用談をすまして、電話口を離れた石島警部に念を押すと、

「そう、そんな女優があつたようだね」

と警部は名刺や温泉宿の領収書には大して気も止めぬ風で、

「それでは白川君、まず夜の昇降機係の橋本という男に當つてみてくれ給え。名刺の方は後にして——」

四

白川刑事が背広を着て、捜査課の椅子に腰をおろすようになったのは、ついこの夏初めからであつた。まだ年も若く、経験も足りず、捜査課では頭の上らぬ末輩まうはいではあつたが、職務じむつとに対する熱と興味とだけは誰にも敗ひをとらないほどの自信も覚悟も持つていた。

今もいとうとおり、最近、特に事件の頻発で捜査課は文字通り不眠不休の大活動をつづけ、彼もここ一月あまりちよつとの閑ひまもないほどに追い廻され、こき使われているのであるが、若輩じやうはいの悲しさ、まだ一つの事件に責任を負わされるといふようなところまでは行かず、いわば走り使いといった程度の軽い仕事しか与えてもらえず、いささか物足りなさを感じていた。昨夜にしたところで、総監みづか自ら出勤の非常警戒ひやうけいというのだから、あわよくば大きな獲物をひろつて一功名樹ていからたててみたいところを、石島

[著者] 森下雨村 (もりした・うそん)

1890年、高知県生まれ。本名・岩太郎〔いわたろう〕。1911年早稲田大学英文科卒。やまと新聞社社会部記者を経て、18年に博文館の雑誌編集者となる。博文館退社後は作家専業となり、「一般大衆に喜ばれる軽い文学としての探偵小説」を目指した〈軽い文学〔ライト・リテラチュア〕〉を提唱する。41年頃に高知県佐川町へ戻り、戦後は故郷で過ごした。1965年5月、脳出血の後遺症のため死去。釣り随筆『猿候川に死す』(1969)を遺した。

[編者] 湯浅篤志 (ゆあさ・あつし)

1958年、群馬県生まれ。成城大学大学院文学研究科博士前期課程修了。大正、昭和初期の文学研究を中心に活動している。日本近代文学会、日本文学協会、『新青年』研究会会員。著書に『夢見る趣味の大正時代——作家たちの散文風景』(論創社、2010)、編著に『森下雨村探偵小説選Ⅲ』(論創ミステリ叢書110、論創社、2017)、共編著に『聞書抄』(叢書新青年、博文館新社、1993)などがある。

[巻末エッセイ] 森下一仁 (もりした・かつひと)

1951年、高知県佐川町生まれ。作家、評論家。東京大学文学部心理学科卒。放送局勤務を経て、79年に短編「プアプア」で作家デビュー。日本推理作家協会会員。森下雨村の遠縁にあたる。主な著書に『コスモス・ホテル』(ハヤカワ文庫、1980)、『森と岩の神話』シリーズ(ソノラマ文庫、1987～91)、『現代SF最前線』(双葉社、1998)など多数。

もりした う そん たん てい し ょう せつ せん
森下雨村探偵小説選Ⅲ

〔論創ミステリ叢書 111〕

2018年1月20日 初版第1刷印刷

2018年1月30日 初版第1刷発行

著者 森下雨村

編者 湯浅篤志

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル
電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266
<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

©2018 Uson Morishita, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1671-5